

明治後期における女子講義録を通じた女性の「学び」

—『家庭女学講義』を事例に—

徐 真真

はじめに

本稿は、『家庭女学講義』を事例に、明治後期における女性の「学び」の一つの形態を解明することを目的とする。

日本の近代学校教育制度は、1872年に公布された「学制」より発足した。「学制」によって女性も教育の対象となったが、実際の就学率はどうであったろうか。女子の尋常小学校就学率をみると、1890年代初期までは30%前後で低迷し続けていたが、その後、急速に上昇していき、1897年には約6割となった。また、女子の中等教育は、1899年に「高等女学校令」が公布されるまで、ミッション・スクールを中心とした私立学校において行われていたに過ぎなかった。「高等女学校令」が公布され、全国に公立の高等女学校が次々と設立されていったが、高等女学校への進学率は、1905年には2%程度に過ぎなかった。その後徐々に上昇していったが、女子の尋常小学校就学率がほぼ100%に達した1910年においても、8%ほどであった。

このように、明治期には女子に中等教育へ進学するルートが開かれたとはいえ、多くの女性は中等段階の学校教育から排除されていた。さらに高等女学校卒業後、女子高等師範学校や女子専門学校などといった高等教育機関に進学したのは、戦前期を通して1%に満たなかった¹。こうした学校教育を受けないあるいは受けられない女性たちは、どのような「学び」をしていたのか。社会教育分野においては、官製や民間の各種婦人団体による学習活動に関する研究が蓄積されてきた一方²、新聞、婦人雑誌、書籍などといったメディアを通じて個人で行われた「学び」には十分な注目が払われてきたとは言い難い。そこで、本稿では「講義録」というメディアを取り上げ、女性の「学び」の一つの形態を探ってみたい。

天野郁夫によれば、講義録は単なる「講義を記録した書物」ではなく、非定型的な教育・学習のメディアとして、通信教育・遠隔教育の原初的な形態でもある³。この意味で、講義録は日本における生涯学習の先駆的形態のひとつであると言える。天野は、講義録は雑誌と書籍の中間的な、しかもその時代のきわめて効率的な、新しい知識の伝達・普及メディアとして出現したものであったと指摘している⁴。こうした講義録は、戦前期において学校教育を受けないあるいは受けることができない人たちに重要な教育・学習の場を提供してきた。

しかし、講義録と言っても、その発行の動機、方式、内容はさまざまであった。天野らの研究によれば、戦前期の日本における講義録は「大学講義録」、「中学講義録」、「実業講義録」、「女子講義録」の4種類に分類されている。1880年代前半に登場した大学講義録と、同年代後半から登場し戦前期を通じて講義録の主流を占めた中学講義録は、その内容も機能も異なるが、いずれも近代学校の存在を前提とし、学校教育の内容あるいはそれに準じ

た内容をもつものであった。それに対して、大正初期に登場した実業講義録は、職業と直結した知識の伝達を目的としている。女子講義録は、1880年代末期に女子としての教養を学ぶ学習書として登場した⁵。

学歴社会が形成されていく明治期においては、以上4種類の講義録の中でも、資格や受験に関わる大学講義録、中学講義録が圧倒的に多かった。それに対して、女子講義録の存在感は薄かった。これは、中等教育という学歴の意味が、性別によって異なるからであると考えられる。そもそも女性は、制度的に高等学校さらに帝国大学に進学することができなかったこともあるため、女性にとっての中等教育いわば高等女学校の学歴は、男性の中等教育の学歴がもつ手段性や有用性が弱かったことが指摘されている⁶。高等女学校の教育に期待されたのは、「地域社会の『中流』としての階級的な威信の源泉」であったため、「実用性だけでなく、あるいはそれ以上に、『常識』や『教養』の涵養にあった」という⁷。こうしたことは、資格や受験を目的とする男性向けの講義録よりは、女性を対象とする講義録が比較的少ないことの一因となると考えられよう。

では、女性を対象とする講義録は、一体どのようなものなのか。それを通じた女性の「学び」はどのようなものなのか。以下の第1章で見ていくように、女子講義録を扱った研究は、それほど多くない。本稿では、先行研究の知見を踏まえ、今まであまり取り上げられなかった講義録の一つ『家庭女学講義』を検討する。『家庭女学講義』は、1906年4月にジャーナリストである羽仁もと子によって編輯・発行され、1907年12月に『婦人之友』へ改題したため、講義録としての発行期間はわずか1年間8ヶ月であった。しかし、一定の読者層を獲得し、その後継誌である『婦人之友』の成功につながっていったと考えられる。ここでは、『家庭女学講義』の発行経緯、内容的な特徴、さらに読者の受容まで視野に入れて検討する。

具体的な作業としては、第1に先行研究を踏まえて、戦前期の日本における幾つかの女子講義録を概観し、第2に『家庭女学講義』の創刊に至るまでの経緯と同講義の特徴を述べ、第3に講義の内容と講師を論じる。第4に読者の投書から、講義がどのように読者に受け入れられていたかを検討する。こうした作業によって、『家庭女学講義』の読者たる女性たちは、どのような「学び」を行なっていたかを明らかにしたい。

1. 戦前期の日本における女子講義録

戦前期の日本における女性を対象とする講義録についての研究は、史料の制約があるためか、多くはない。以下では、それに関する現存の先行研究を踏まえた上で、今日確認できる女子講義録の中から、いくつかの典型例を取り上げ、時系列で見ていく。

まず、天野らの研究では、「女子講義録の世界-『女学雑誌』の一点描-」という章が設けられている⁸。その章の著者である田代和久は、1885年に創刊された『女学雑誌』と、1887年にその編集者であった巖本善治より刊行された『通信女学講義』に注目している。そこで、前者は「在郷と東京を文字通り『媒』する学習情報、文化情報の源泉」とされており、後者は「きめの細かい通信教育の手法をとっている」講義録であったとされている。さらに後者の刊行により『女学雑誌』は「高尚な評論雑誌というイメージ」を変え、読者の裾野が広がっていったという。『通信女学講義』は月1回の刊行で1年で卒業とする⁹。第1次の講義録は、1887年4月から1888年11月までに15巻を刊行し、第2次は1890年1月

より開講し、講師は明治女学校の教師が名を連ねている。1890年の全科修了生は、700人を超えているという。田代は、『女学雑誌』の理念は羽仁もと子の『婦人之友』に、『通信女学講義』のそれは成瀬仁蔵の『家庭週報』や『女子大講義録』に継承されたと指摘しているが、その関連や継承について詳しく論じておらず、他の女子講義録についても触れていなかった。

一方で、関本仁は、『通信女学講義』、『女子大学講義』、『早稲田高等女学講義』を取り上げ、戦前の女子講義録における独学者の意識について考察している¹⁰。関本は、『通信女学講義』を女子中等教育が十分に整備されていないなかで、比較的早い段階から女性を対象とする講義録としている。また、女子中等教育との接続という観点から、1909年に日本女子大学校が発行した『女子大学講義』を捉える。『女子大学講義』は、日本女子大学校の科目に準じ高等教育レベルの内容を持っており¹¹、日本女子大学校の卒業生を含めた、家庭経営の中にいる人、教職等に就いてさらなる知識を得ようとする人などを対象とする。さらに、1922年から発行されていた『早稲田高等女学校講義』の発刊経緯、科目内容、受講者の様子などを詳しく検討した上で、以下のことが明らかにされている。関本は、『通信女学講義』と『女子大学講義』は、卒業試験を設けていない点と質疑応答が講義録紙面で多くの人たちに周知するといった形態に過ぎなかったという点から、あくまでも読み物としての側面が大きく、「通信教育」としての性格は薄いと指摘する。それに対して、『早稲田高等女学校講義』は、校外生証（学生証）や徽章を配布し、質疑応答の場を設け、希望者には卒業試験を課すなど通信教育の体裁がより整えるようになったことと、受講者の多くは、「専検」等の受験・合格、つまり高等女学校卒業資格の獲得という明確な目的を持っていたことが指摘される¹²。

ほかに、遠山佳治による『女学講義』に関する研究が挙げられる¹³。『女学講義』は、1895年11月に大日本女学会によって刊行された講義録である。大日本女学会は、女子教育を国家に欠かせないものとし、国家における女子教育の目標である良妻賢母の育成の推進に沿った考えに立ち、高等女学校を補填する意味として、自宅でも学べる女子通信教育の必要性から、『女学講義』を発行した。『女学講義』は、月1回刊行し、講習期間を2年間としていた。第1回の講習は、創刊から1897年11月までとし、合計24巻が発行された。遠山は、第1回講習の授業科目と担当講師を検討し、その内容を3つの系統に区別している。すなわち、第1は修身・作歌・作文・習字・詞藻に代表される授業科目で、良妻賢母の思想や国家・国民意識を内容とし、講師は御歌所、神職、有職故実、日本弘道会などに関係の深い人々が担当する。第2は家事経済・育児・家庭教育・礼法・裁縫・割烹・活花・点茶に代表される授業科目で、いわゆる家政・保育系に類似する内容で、講師は現場の女子教育に従事する実学系の教員たちである。第3は地理歴史・理科・博物・生理衛生・看護に代表される授業科目で、講師は東京帝国大学などにおける専門分野の若手研究者を中心とする。遠山によれば、『女学講義』は1906年に第7回までの発行が確認されている。会員数は、第1回から第6回まで、合わせて3万人を超えている¹⁴。遠山は、各新聞批評を取り上げ、そこで女子教育を受けられない地理的条件、経済的条件、習慣等の諸条件を克服できる通信教育として『女学講義』の評価が高く、さらに「内外ともに女子教育テキストとして申し分のない出来である」と賞賛されているという。

以上の先行研究を踏まえて史料調査を行ったところ、女子講義録には他に1905年に大

日本淑女学会によって発行された『女学講義録』が挙げられる。大日本淑女学会は、「一般の女子に在りては、国民の母たるべく、完全なる常識を養ひ貞淑賢良の婦徳を有すれば即ち足る、是れ中等教育の普及は、現下の女子に緊急切実也」という趣旨で、「最も進歩せる通信教授法」によって『女学講義録』を刊行した¹⁵。『女学講義録』は、高等女学校の学科を2年間で修了する。実際に刊行された内容は、高等女学校の学科目に準じたものであり、講師は、女子教育家を中心としていた¹⁶。

ここまで、戦前期の日本における講義録をいくつかの事例に沿って概観してきた。『通信女学講義』と『女学講義』は、「高等女学校令」が公布される前、つまり女子の中等教育が整備されていない時期に刊行されたものの、その内容は女学校の教育内容に準じたあるいはそれに近いものとなっている。家政と教養の両方から構成されており、どちらか言えば教養の方に重点が置かれていると言える。それに対して、『女学講義録』と『早稲田高等女学校講義』は「高等女学校令」が公布された後に発行され、その内容は高等女学校の科目に準じたものであった。特に高等女学校への入学志願者の急激な増加が見られた大正後期に生まれた『早稲田高等女学校講義』は、通信教育の体裁が整えられ、内容も形式もより一層学校教育に近づいた。

これらの女子講義録は、発行の時期、内容、形式といった点が各々異なっているものの、学校の存在を前提としながら、通信教授という形で女子教育を普及させようとする点で共通していると言える。しかし一方で、学校教育の内容に準じない講義録がある。本稿で取り上げる『家庭女学講義』は、「高等女学校令」が公布された後においても、「女学校代用の講義録」と際立って一線を画していた講義録である。

2. 『家庭女学講義』の創刊

(1) 『家庭女学講義』の創刊経緯と「従来の講義録」との違い

『家庭女学講義』は、1906年4月に羽仁もと子によって発刊されたものである。もと子（旧姓、松岡）は、1873年に青森県に生まれ、小学校の高等科までの課程を終え、1889年に祖父とともに上京し、東京第一高等女学校卒業後、東京女子高等師範学校の受験に失敗したため、私立の明治女学校の高等科に入学しようとした。しかし私立の学費が払えず、当時の校長であった巖本善治に手紙を送り訴えた結果、月謝が免除されたほか、巖本が主筆する『女学雑誌』の原稿に振り仮名をつけるという仕事も与えられ、それで得た収入を寄宿料にあてることになった。もと子はこうした仕事を通して、文壇、宗教界、教育界などの名士に出会う機会に恵まれた。それは、のちに自ら雑誌を編集する際に大きな役割を果たしたと考えられる。

もと子は明治女学校に入学した翌年に帰郷し小学校の教師となったが、結婚、離婚を経て、再び上京し、そこで女中と小学校の教師を経験した。その後、報知新聞社の初めての女性校正係として採用され、1898年に入社後、もと子は校正のみに満足せず、自ら当時の「名流婦人」を訪ね書いた記事が評価されたため、専門の記者として採用された。その後、同新聞社に入社した羽仁吉一と出会い、職場結婚を経て退社するに至ったが、このような当時は珍しかった女性ジャーナリストとしての経験は、のちに自ら雑誌を創刊する土台となった。

1903年4月にもと子が初めて編集を担った家庭雑誌『家庭之友』は、内外出版協会によ

って発行されたが、第8巻10号(1908年12月)を最後に、もと子はその編集をやめた¹⁷。1906年4月に『家庭之友』を編集する傍ら、自宅を拠点に「家庭女学会」を立ち上げ、『家庭女学講義』を発行することになった。『家庭之友』の第3巻12号(1906年3月)で、以下のように『家庭女学講義』の発行を予告した。

私共は多くの方から、主婦の修養の助けになるやうなものがないだろうか、あるなら知らせて欲しいという手紙を受け取りましたことが、今日迄に幾度びあつたか知れません。其度に斯る類の書籍や雑誌のないことを遺憾に思ひ、若しも私共に余力があるならば、是非此目的の雑誌を出したいものだとして早くより心掛け、何ういふ風にしたならば、最も完全に其目的を達することが出来やうかと、種々工風を凝らして居りました所、近来漸く其考案が熟すると共に、一方に於て家庭之友の基礎も全く定まり、二人の子供も追々手がぬけるやうになりましたから、「家庭女学講義」と名づけ、来る四月五日を以つて、その第一号を発行することに決しました¹⁸

もと子は『家庭之友』の読者の要求に応じて、「主婦の修養の助けになる」ものをつくるようになったことがわかる。また、仕事と家庭の両面において、彼女に新しい雑誌をつくる余裕ができたことが発行の契機であったと記されている。さらに、『家庭女学講義』は講義録として発行されるが、従来の講義録とは一線を画すると示される。

従来の講義録に慍馬らず思ひますのは、その講義の實際的でなく、且つ甚だ親切を欠いて居ることでありませぬ。講義録とさへ云へば、鹿爪らしく、分り難く、従つて面白味のないばかりか、折角苦んで読んだ所で一向実地の役には立たないと云ふやうな感じのするものも無理ではありません。(中略)従来の講義録などとは、全くその趣を変へまして、何処までも親切に、何処までも實際的に、家庭を中心として、婦人に必要なる智識を供給したい考であります¹⁹

このように、もと子は従来の講義録が「実地の役には立たない」と批判し、『家庭女学講義』ではそれとは異なる実用性に重点を置くとして述べている。講師も、従来の講義録のように女学校の教師でなく、「学識と実験とを兼ね備へたる人々」に依頼する。さらに後述するように、講師たちが原稿を寄せるという形ではなく、もと子自身が直接に彼ら・彼女たちに取材した上で執筆する。「分り難き所は繰返してお尋ね致し、平明にして興味ある談話体」にし、読者は「恰かも一堂に集つて、親しく名家の談話を聞かれると同じ感じ」を持つように、分かりやすさを重視する。こうして、内容、講師、編集の方法のいずれにおいても、『家庭女学講義』は従来の講義録とは異なることが強調されている。

発行の予告では、育児家政、地理歴史、家庭衛生、倫理道德、時事解説という科目を設けること、月1回50頁程度で、2年で完結することが記されている。対象とする読者は、「勉強の助けになる読物を求めて居らるゝ主婦の方々は云ふ迄もなく、女学校に入ることの出来ないのを残念に思つて居らるゝ方々、女学校に通学して居らるゝ人でも、特に今日の教育の實際的でないことを遺憾とせらるゝ方々及び家庭之友の月一回を物足らず思はれて、二回発行を望んで居らるゝ方々」とあるように、家庭の主婦や女学校に通えない人だけではなく、女学校に通っていても学校教育に満足できない人をも対象とする。ここでは、もと子が当時の女学校の教育が「實際的でない」と批判していることが見て取れる。この点については、1906年3月に『東京朝日新聞』と『読売新聞』に掲載された同講義の広告においても明確に示されている。

結婚前の婦人、新家庭の主婦、形式的の学校教育にあきたらず思ふ人々、家事のかたはら勉強したいと思ふ人々のために最も進歩したる育児家政の実用的智識と婦人に必要なる社会的智識を与ふ一冊、読めば読んだだけ役に立つ。世間に数かる女学校代用の講義録とは違ひ升。講師は第一号の思想家教育家及び母として主婦として令名ある人々。編輯羽仁もと子専ら之れに当る初号四月十日発行。(後略)²⁰

広告では、「従来の講義録」は「女学校代用の講義録」という表現に変わった。家庭を持つことを前提とする女性にとっては、学校教育だけでは足りない。女性は家庭に入っても勉強が必要である。つまり、家事をしながらも、育児家政に関する「実用的智識」とある程度の「社会的智識」を学ばなければならない。『家庭女学講義』の内容は、家庭生活に役に立つ点、言い換えれば実用性を持つという点では、女学校代用の講義録とは異なるという。当時の女学校代用の講義録とは、第1節で述べたように、高等女学校の課程内容に準じてつくられた『女学講義録』のことだと推測される。女学校の教育に、さらに女学校代用の講義録に対する批判と、それに対抗する『家庭女学講義』の意義が、繰り返し強調される。それは、家庭の主婦や母になる「資格」を与えることにある。

家庭女学講義は、世間に数ある女学校代用の講義録とは、其趣意に於て、また其内容に於て、全然異つたものでありますから、私共は結婚前の婦人に向ひ、主婦として母として、また文明の婦人として、恥かしからぬ資格をつくられるために、その女学校を卒業なさつたとなさらぬとに関わらず、一様に此の家庭女学講義を読まれんことをお勧め致します²¹

ここでは、結婚する前の女性にとっては、女学校を卒業したかどうかという「学歴」よりは、家庭における主婦、母、また文明の婦人としての「資格」が重要だという価値基準が提示されている。この「資格」は、女学校を卒業すること、あるいは女学校代用の講義録を購読するのみでは、獲得できないのである。のちに新聞に掲載された広告に「理想的の主婦たらんとするものは、理想的の母親たらんとするものは、見よ」²²や、「主婦の為め母親の為め唯一実用講義録」²³とあるように、『家庭女学講義』は、主婦と母親の「資格」を獲得できることを目玉にして読者を掴もうとしていることが分かる。

(2)『家庭女学講義』の編集方針の特徴

『家庭女学講義』は「女学校代用の講義録」とは異なる特徴をもつことが強く意識されているが、編集方針はどのようなものなのか。その特徴として、①分かりやすさと実験を重視すること、②編集者が自らの主婦と母としての経験を生かすこと、③「復習と質問」欄を設けるといふ3点が指摘できる。

①分かりやすさと実験重視

『家庭女学講義』が他の講義録と異なる点として、担当する講師と原稿の集め方が挙げられる。まず講師は女学校の教師ではなく、後述するように、学者や医者、実際の経験をもつ家庭の夫人などに依頼する。次に編集者のもと子は講師らに取材し、各科目の内容を理解してから、あるいはその技能を習得してから、自ら講義を執筆する。

この家庭女学講義も最初の一頁より最終の頁まで、一行も一手を借らず、すべて自身に、講師のお話を伺つて、不審の箇所は質問し、さてその智識をどういふ風に記した

ならば、最も平易に且つ興味多く、而して或者は直ちに実用に適するやうになるであらうかといふことを考へて、悉く一人で認めるものであります。人手を借りてした仕事は、どうしても自分の思ふやうに、丁寧親切に行きませんから。(中略) 私自身出来るだけ多数の会員諸君に代つて、自ら種々の研究をなし、この講義録をして、真に価値あるものとなしたいと思ふので御座います。通り一遍に記して置けば、苦勞なしに出来るものも、少しでも意に充たぬ所は幾度も調べなほし聞き直し考へ直して、実地の役に立て様とするのには、なかへに骨の折れる仕事です²⁴

このように、もと子は講師が話した内容を噛み砕いて、読者に伝わるように執筆しており、講義の分かりやすさを重要視している。また、書いてある文章は、言文一致体で読みやすさが追求される²⁵。さらに、家政に関する技能は、もと子自らの家庭における経験または彼女が講師から学んだことを講義の内容にする。例えば、料理に関しては、もと子は講師である宇山夫人から、材料の分量、値段、作り方などを学び、自ら実験してから「庖厨」科目の内容にしている²⁶。ただし、地理、歴史、時事解説といった科目については、講師に原稿を依頼する。もと子はそれらの科目に関する知識が乏しいため、講師の話をもとに執筆することはできなかったが、相関する書物を読んで、文章を問答体にする²⁷こと等によって、そういった科目の分かりやすさを追求した。

②編集者の主婦と母としての経験

編集者のもと子自身は、主婦であり母でもあるため、仕事と家庭の両立問題に直面している。家庭の都合によって、予想通りに雑誌や講義の発行ができないことは多々あった。しかし、こうした主婦と母としての経験があるからこそ、講義の内容がより実用性が高く、読者との関係が近くするように編集できたと考えられる。

家庭の中に病氣等の心配や忙はしい事の起る度に、雑誌の遅れるのが気になつて、主婦たり母たる職分と自分の今の事業とは両立しないかと思ふこともあります。私共のために何よりの打撃でありました涼子の思ひがけなき永眠は、いよへ益々誠意誠心を以て記載せねばならぬ多くの感想を我々に遺したやうに、すべて自分の家庭に於ける常ならぬ出来事は、その局にあたりつゝある間こそ、雑誌のために用ゆべき時と心余裕とを奪ひ去るのでありますが、その過ぎ去つた後には数々の教訓を残してくれるので御座います。私はいつもかゝることのある度に若しき自分は主婦でもなく母でもなき気楽な身分であつたならば、わが家庭之友並に家庭女学講義に於て、皆様の真実なる友人となることが出来ないのであると思ひ返して、無上の慰藉を感ずるので御座います。どうぞ私の一身の単一なる雑誌記者でないことを以て、此のふたつの雑誌の最も大なる特色であると御思召され、これに伴ふ種々の不行届を御許し下さるやうに願ひます²⁸

③「復習と質問」欄

『家庭女学講義録』では、「復習と質問」という欄を設けて、前号に掲載した「各学科の要旨を、それい摘み得るやうな問」を掲げることで、前号の内容を復習させる。さらに、「講義中に不審な個所ありたる時は、遠慮なく質問ありたし。お答へする価値のあるものは紙上に掲げます。また直接応答を望むる方は返信用の郵便切手を添へられたし」とあったように、誌上に質疑応答のコーナーも設けたり、手紙で質問の答えを送ったりする

ことが計画されていた。このように、読者が復習と質問することができるような通信教育の形式を取っていることが分かる。

3. 『家庭女学講義』の内容

(1) 内容構成

『家庭女学講義』は、具体的にどのような科目で構成され、それぞれの科目の内容はどのようなものであったか。講義の編集方針によると、講壇、育児、家政、衛生、庖厨、手芸、歴史、地理、科学、社会という学科目が配置された²⁹。

「講壇」では、「毎号代るべ、先輩諸君を煩はして、種々の方面より、今の時勢に適応したる倫理の要旨を説き明かし、修身齊家の根本思想」を養うと儒教の言葉を用いて、個人の修養と家庭を大事にすることに重点が置かれた。この欄に掲載されたものの講師とタイトルをみると、浮田和民「婦人の天職」(第1号)、鎌田栄吉「妻の本分」(第2号)、三宅雄次郎「舅姑に対する心得」(第3号)、加藤弘之「兄弟に対する心得」(第4号)、安部磯雄「家庭と雇人」(第5号)、羽仁もと子「親戚と友人」(第6号)、羽仁もと子「家人に対する主婦の責任」(第7号)、田川大吉郎「家人に対する主人の責任」(第8号)、浮田和民「倫理上より見た結婚」(第9号)、羽仁もと子「女ごころ」(第10号)、羽仁もと子「勝気とは何乎」(第11号)、羽仁もと子「虚栄心の源」(第12号)、棚橋絢子「家を治むるの秘訣」(第2年第1号)、山脇房子「内助とは何ぞ」(第2年第2号)となっている。講師は当時の著名な知識人ともと子が担当していた。

「育児」では、「養育と教育との二つに分けて、養育のことに就ては、順序を追ふて毎号加藤待医の講義を掲載します。教育の方は、実験に富める母親並に教育に熱心なる方々の御意見を、私自身の定めて居ります順序に従つて、その都度その場合に適当した方」に依頼するとしている。実際の記事を見ると、育児については、予定通りに主に医学博士である加藤照麿が担当し、家庭教育についてはボールス夫人ともと子が担当していた。

「家政」では、「家庭管理、家庭実務の二つに分ち、家庭管理を更に家事経済と家事整理との二門」に分け、もと子が主として担当し、「下婢の使ひ方、社交の方法、衣服の整理、掃除その他の細かき注意は、その時々老練なる方」に依頼した。後者の担当者は、加藤照麿の妻である加藤常子や、齋藤春代、小笠原清務であった。

「衛生」では、「衣食住の衛生及び生理、病理、看護法、薬物使用法の五つ」に分かれ、「山上ドクトルに耳、鼻及び咽喉、眼、脳など、人身全般にわたつて、簡明にして完全なる生理病理及びその衛生」を記載した。この欄は、主に医者や看護婦が担当していた。

「庖厨」では、「料理と、庖厨に要する家具その他の整理取扱等」を、「独り料理のみならず、庖厨に就ての智識と、精細徹底したる実験」を持っている宇山道碩の妻である宇山禄子に依頼した。

「手芸」では、「今の家庭に主として入用なものは、勿論和服裁縫でありますけれど、それは必ず何方でも別にお学びになることでありますから省きました。で、一回の説明で分るやうな仕立もの、またはその他の思ひつきなる実用的手芸」を掲載し、齋藤春代が担当していた。

「歴史」では、「日本歴史は既にどなたも大体をお学びになつたものとして」、そして「先進国の発達の跡を知り、その長短を考へるのは、最も興味ある事でもあり、また極めて有

益なことである」ため、松村介石に依頼し、「英吉利、亜米利加、獨逸、仏蘭西等の發達の有様」について掲載するとした。

「地理」では、「日本を出発して、世界の国々を漫遊し、その主なる風俗並に以上の歴史に於て講ずることの出来ません他の国々の進歩發達の大体をも、旅行者の見聞」と共に掲載するとした。

「科学」では、「日本の婦人に最も欠けて居るものは、科学的の智識」であるため、「本欄に於て、興味ある科学上の話を通俗に説明」するとした。

「社会」では、「毎月その月の重なる社会上の出来事を面白く解説」するとし、この欄については適切な講師が得られなかったため、もと子が関連する書物を読んで、自ら執筆していた。

このように、『家庭女学講義』は以上の10科目から構成されている。第1巻（第1号～第12号）における各科目の分量をみると、家政（116頁）、衛生（116頁）、育児（96頁）、講壇（68頁）、手芸（53頁）、歴史（51頁）、庖厨（46頁）、地理（38頁）、科学（12頁）、社会（8頁）となっている。家政、衛生、育児が大半を占めている。講壇、歴史、地理、科学、社会という教養に関する科目は3割弱であった。こうした内容構成から、『家庭女学講義』が実用性を重視する一方で、女性の教養に関する内容にもページ数を割いていることが分かる。つまり、同講義が目指している「主婦の修養」とは、育児家政などといった「実用的智識」と女性として必要な「社会的智識」の両方から構成されているものの、「実用的智識」がより重視されていることが分かる。

(2) 講習会の開催

『家庭女学講義』には講義だけではなく、会員に向けて、主に家政欄の内容を実践するための講習会の開催についても載せられていた。例えば、以下のように、洋服の取り扱い方の講習会を開く趣旨が掲載されている。

本号家政欄中、洋服の取扱方といふ、斎藤春代氏のお話にありました、洋服の火熨斗のかけた、夏服の洗濯方等は、是非稽古して直ぐに実行したいと思ひますので、御多忙な斎藤氏にお練合はせを願ひ、会員方のために、講習会を開くことに致しました。一週一度三時間位四度も教へて戴きますと、出来るやうになるさうで御座います。（中略）時日と場所と費用（多分十銭内外）は、御申越の人数によつて相定め、御報知致します。

（中略）本会はこれから月一回または隔月に、かゝる会合を必要に応じて開きます。唯それに就てお気の毒に思ひましたのは、地方の会員方です。どなたでもさう度々おいでになることが出来ずまいから、それで種々考へて、特に地方の会員方のために、すべてのお稽古を夏にまとめて、二週間ぐらぬ講習会をしたいと思つて居ります³⁰

こうして、「家政」という科目の講師たる斎藤春代が、洋服の取り扱い方について講習会を開くことが告知されている。次号では、講習会の実施の時間と場所が詳しく掲載され、つまり「十月の第四木曜日より始めて、毎木曜日毎に午後一時より始めて三時に終わるといふことに致し、三回で洗濯まで終了の見込で」、場所は斎藤の自宅に設定されている。また、時より「仕事会」や「話し会」を開く意向が示されている³¹。さらに、その次の号には開催された講習会に関する報告が掲載されている。

洋服取扱方のお稽古会は予定の通りに開かれまして、第一回はズボンの火熨斗かけか

た、第二回は上衣と胴衣、第三回は夏服の洗濯法で、二十四人の会員方は、三回目まで、唯特別に御都合の悪かつた一二を方の除くの外は、揃つて御出席になりました。多数は極く健全な家庭の奥さん方で、質素にしてしとやかなる方々はばかり、真面目に熱心にお稽古になる様子が、他の婦人会には見受けぬ程のよき集りでありました。たゞ時間のないために、お稽古の後で緩々お話しをする機会のなかつたとは残念でありますけれど、お正月には襟飾りのこしらへ方でも教へて頂き、各々に持参の布で拵へながら、お話しでもするといふ、半ば親睦を目的とするあつまりを催したいと思つて居ります。なほ一ヶ月に一度位づゝ、一回々々家庭の実務直接益になるやうなあつまりを開く積りで御座います³²

ここから、洋服の取り扱い方に関する3回の講習会が行われたことが分かる。参加者は24名、主に家庭の主婦であり、彼女たちが真面目に稽古していた様子が記されている。また、会員間の交流を促進するために、親睦会や、月1回のあつまりを開く計画が示されている。次号では料理の稽古会、つまり「ライスカレーにコロケーにオレンジゼリーがまたはその外の菓子一種位を稽古するとにし、朝の九時キッチリに始めて、出来たお料理で昼の食事を御一緒に戴き、二時頃散会」³³と、より長い時間で、交流を取れる集まりを企画している。ほかに、「子供洋服裁ち方」の講習会も計画されている。

本誌に引続き掲載いたしました、齋藤春代氏の子供洋服かたのとり方は、本号にて完結いたし、来月発行の第二年一号よりは、洋服下着よりはじめて、実地裁縫に入りますので、これまで掲載し来りましたかたのとり方に就て、実地講習会を開きます。講師は勿論齋藤春代氏で御座います。場所は麴町富士見町一ノ二十五齋藤春代氏方、時日は七月二十六、二十七、二十九の三日間（二十八日は日曜日ゆえ休み）、朝八時より十一時まで。講習科は本誌の会員は五十銭、会員でない方は七十銭で御座います。子供の身体にあふ所の恰好のよい洋服をさせるためには、是非ともかたのとり方より始めてお習ひに並べねばならぬからであります。なほ今後実地ぬひ方の講習をも、本誌の記事の切り目へに開くことに致します³⁴

このように、もと子は主に家政に関する講習会を計画し、実施していた。『家政女学講義』誌上にまず記事を掲載し、その内容を実践するために講習会を開く。講習会は、担当する講師が参加者を講義の内容を実践できるように指導するだけにとどまらず、会員間におけるリアルな交流を行う機会を提供している。つまり、講習会を通して、読者の学びは講義を通じた独学から、対面的なリアルな学びに変わったのである。

4. 『家庭女学講義』に対する評価と読者の反応

(1) 家庭女学講義に対する評価

『家庭女学講義』は、元々2年間で完結する予定であったが、1907年12月に『婦人之友』へ改題したため、実際には1年9ヶ月間で合計16号の発行となった。改題の理由については、郵便規則の改正によって、講義録は第三種郵便物の取り扱いを受けられず、郵送料がこれまでの5厘から2銭へと高価になったことと、発送等にも不便が生じたからである³⁵。そのため、講義録としての『家庭女学講義』の発行期間は2年未満で終わった。また発行部数に関する正式な記録は見当たらなかった。しかし、好評であった初号は3版、第2号は再版までに至った記録が見られる³⁶。さらに、第4号に「『家庭女学講義』は（引用

者注)、既に第四号を出すやうになり、最初の一人より築きあげた会員方の数々が、いつしか三千を超えるやうになりました³⁷と掲載されており、同号が発行された1906年7月時点では、講義の購読会員数は3千人を超えていたことが分かる。

これらの読者の反応を見る前に、当時のメディア界において『家庭女学講義』がどのように評価されていたかを見ていく。まず『東京毎日新聞』では以下のような評論が見られる。

家庭女学講義 主筆の愛児病気の為に二回休刊するの止むなきに至れる同講義は今回漸く家庭有要の材料を満載して其第九号を発刊し主婦界の渴を医しぬ中に就て浮田氏の結婚論、加藤博士の百日咳、小笠原氏の対来客礼儀、羽仁女史の一家の食物など必ず婦女子の読むべきものなり³⁸

一方で、他の講義録と比較して、質が低いという批判的な評価も見られる。『学生タイムス』において、各種の講義録を評する文章では、「高等女学科」という項目で、以下の5つの講義録を言及している。すなわち、大日本女学会の『女学講義』、大日本高等女学会の『高等女学講義』、大日本淑女学会の『女学講義録』、帝国高等女学会の『高等女学科講義』、最後の5つ目に家庭女学会が発行する『家庭女学講義』を取り上げている。そこで、「会費が至つて低廉で毎号読みきりなのが一寸面白い。手軽な方法だ。早稲田の前の中学教育みたやうな良いものを出して貰いたい³⁹」という評論が付けられている。「早稲田の前の中学教育」とは、おそらく同じ筆者の前の投稿において、早稲田中学講義録を論評していることであると推測される。そこで、同筆者は早稲田中学講義を「吾人未だ其内容を精査せざれど学校の面目に対しても且又中学教育の復活としいへば上乘のものならん⁴⁰と高く評価している。『家庭女学講義』は会費が安価であることと、毎号読切であることを評価する一方で、質の面では早稲田大学が出している中学講義録より劣っていると指摘している。つまり、『家庭女学講義』は、実用性をより重視するという他の女子講義録とは異なる特徴を持つ一方、この特徴は、同講義の質が低いと思われる原因にもなると考えられる。

(2) 投書からみる読者の反応

では、『家庭女学講義』の読者は、どのように『家庭女学講義』を評価していたのか。彼女たちが講義録をとった学習の動機や学習の様式について検討してみたい。具体的には、「編輯記事」欄に掲載された読者の投書を手がかりとして検討する。まず、以下のように、高等女学校長からの投書が掲載されている。

新発田高等女学校長佐藤氏より「家庭女学講義、号を逐ひて、益々整頓進歩し行き候事大慶に存じ候。申す迄もなきことながら、学校を出てたる若き人々の日にへ修養を疎になし行くことは現今の通弊にこれあり、私共の常に苦心致し居り候次第に御座候。家庭女学講義はこれらの人々に対し、恰好のものなるべく存候に付、当校卒業生の間にも紹介いたしたく」とて、初号より各数冊づゝの御注文がありました⁴¹

高等女学校の校長は、女学校を卒業した若い女性が修養を続ける必要があるとし、『家庭女学講義』は彼女たちにとって適切な存在であるととらえる。それゆえに、卒業生に同講義を勧めている。このように、『家庭女学講義』の価値は、女子教育の現場にいる高等女学校長によって認められたのである。次に、『家庭女学講義』を新婚の贈り物としてもらった読者もいる。

まことによき雑誌と講義録を御発行になりまして難有存じます。雑誌屋の店頭には家庭とか婦人とか名のつのが甚だ多くありますが何れも（と云つては過ぎませうが）勸工場を見る様にキレイではあるが雑駁なものばかり、其中より純潔と真面目とを尚ぶ婦人方に何の心配なしに推薦し得べきものとして「家庭の友」を得たことを感謝して居ります。女学講義を送つていただく宛名の人のおぢさんは彼女の結婚の祝ひの品の重なるものとして家庭之友と「講義」との一ヶ年分を以てしました⁴²

この読者は、『家庭女学講義』は他の女性向けの雑誌と講義録より「純潔と真面目」であると高く評価している。また、親戚から新婚の贈り物としてもらったエピソードからも、『家庭女学講義』はこれから新しく家庭を築く若者にとって必要であることを読み取れる。さらに、すでに結婚している読者から、講義の内容をそのまま家庭で実行しているという投書もある。

伊予小西氏より「家庭女学講義を購読しており、まだやうへ三ヶ月であります、この短い間にも私共の家庭はそれによりて何程利益したか知れませんが、殊に近頃は家内のものが心から信用しますので、講義録はわが家庭に一種の權威をもつやうになりました。女学講義にかう書いてあつたから、と云へば、それが直に家中に行はれます。家内一同に代つて深くお礼を申しあげます」との御書面がありました⁴³

門司増田氏より「家庭女学講義を購読いたし候以来、日なほ浅く候へども、私共の家庭に幸ひなる変化を与へ候こと、一二あらず厚く感謝いたし候」とのお手紙を受取りました⁴⁴

三河木原氏より「数多き雑誌の中にて、初めより終まで悉く熟読いたし、一々有益に存じますのは、実に家庭之友と家庭女学講義とで御座います。別けて先日御記載になりました下婢の使ひ方に就ては、種々思ひ当る事有之喜んで拝読いたしました（後略）」とのお手紙がありました⁴⁵

読者は『家庭女学講義』を、家庭の中で「一種の權威」をもつものとみなしていたことが見て取れる。講義の内容が、そのまま家庭の中で実行される。そして講義を購読して以来、家庭によい変化があったという読者もいる。こうした記述から、同講義が読者の家庭に及ぼした影響力の大きさを窺い知れる。さらに、東京に行く際にもと子を訪問するような地方の読者もいた。

大阪村山氏より「私共御会へ入会いたしましてより、家事の上に思想の上に種々なる利益を得誠に嬉しく、御高配常に難有存し居ります。都合上来春は御地に参ることになりますから、是非おん目もし致したく今より楽しんで居ります」との御手紙がありました。折々地方の愛読者のお尋ね下さることが私共にも非常な楽しみで御座います⁴⁶

このように、地方の読者ともと子の間にも雑誌を超えたつながりがあることを見て取れる。誌上に掲載された投書は、いずれも『家庭女学講義』を高く評価しているものであった。もちろん、これは編集者が選択しているというバイアスがあるが、講義の内容は、多くの読者の家庭にとって実用性が高いことは間違いないであろう。このような読者の受け止め方は、同講義の編集の理念と合致していたことが窺える。

おわりに

戦前期の日本における女子講義録は、通信教育という形で女子教育を普及させようとする

るものが多かった。これらの講義録は、学校の存在を前提としており、その内容は学校教育に近いものであった。しかし一方で、本稿で取り上げた『家庭女学講義』のように、「高等女学校令」が公布された後に発行されたが、従来のいわゆる「女学校代用の講義録」とは一線を画し、もっぱら実用性に重点を置くものもあった。『家庭女学講義』の内容は、育児家政手芸に関する実用的なものが大半を占めている一方で、教養に関する内容は3割未満であった。さらに、家政欄や手芸欄における講義の内容に沿って、実地講習会を開き、講師による研修が行われていた。こうした講習会は、ただの実用的な技能の習得にとどまらず、読者間の交流を促した。また、読者の投書から、女学校を卒業したばかりの女性にも、すでに結婚して家庭に入った女性にも読まれており、家庭における実用性が評価されていたことが分かる。

ここから見てくる読者の「学び」には、2つの特徴がある。一つ目は、『家庭女学講義』を通じた「学び」の内容は、教養より実用を重視していたことである。同講義は当時の実際の家庭に役立たない「女学校代用の講義録」とは違い、実用性を重視する点については、読者から高く評価されていた一方で、質の面では中学教育としては物足りない、さらに言うと、実用主義に走りすぎているのではないかという批判も浴びた。この批判を現代的な観点から読み解くと、『家庭女学講義』は、女性の学びを実用的なもの、すなわち家庭に直結する学びに縛り付けるものであったとも考えられる。こうした女性の学びは家庭に有用であるという意義がある反面、そのような学びに女性を束縛することにもなりかねない。なぜこのような女性の学びの束縛が生じるかについては、時代性を踏まえ、多角的に検討することが必要である。この点について本稿では十分に検討できなかったため、今後掘り下げていきたい。

もう一つは、学びの形式についてである。講義を通じた独学から、講習会を通じた対面的なリアルな学びに変わっていった。『家庭女学講義』は1年9ヶ月の発行を経て、『婦人之友』へ改題されたが、編集者のもと子によると『婦人之友』は勿論、家庭女学講義の内容及びその特色を継続するつもり⁴⁷であるとされている。『婦人之友』の読者は、1930年に「全国友の会」の結成に至ったことがよく知られている。しかし、『家庭女学講義』と『婦人之友』との連続性を考えれば、『婦人之友』がどのように『家庭女学講義』を継承していったか、さらに読者の「学び」はどのように変わっていったのかについての考察が必要である。この点についての分析は、今後の課題にしたい。

1 稲垣恭子『女学校と女学生-教養・たしなみ・モダン文化-』中公新書、2007年、7頁。

2 例えば、千野陽一『近代日本婦人教育史-体制内婦人団体の形成過程を中心に-』ドメス出版、1979年、渡邊洋子『近代日本女子社会教育成立史-処女会の全国組織化と指導思想-』明石書店、1997年。

3 天野郁夫「近代化と講義録-第一部序にかえて-」天野郁夫他「近代化過程における遠隔教育の初期的形態に関する研究」放送教育開発センター『研究報告』第67号、1994年、6頁。

4 天野郁夫「第1章 大学講義録の世界」天野郁夫他、同上、19頁。

5 菅原良芳「第2章 中学講義録の世界」天野郁夫他、同上、41頁。

-
- 6 天野郁夫編『学歴主義の社会史-丹波篠山にみる近代教育と生活世界-』有信堂、1991年、96頁。
- 7 同上、109-110頁。
- 8 田代和久「第4章 女子講義録の世界-『女学雑誌』の一点描-」天野郁夫他、前掲、116-118頁。
- 9 第1次の内容は女子生理、育児法、和文一斑、家内理学、経済学、歴史等となっており、第2次の学科目は万国史、日本歴史、算術簿記、理化学、生理学、動植物学、作文法文例、料理、歌詠方、女礼、和文読本、漢文読本、家政学、裁縫、図入地図、英学でより充実したものとなっている（田代、同上、117頁）。
- 10 関本仁「戦前の女子講義録における独学者の意識についての一考察」早稲田大学教育総合研究所紀要『早稲田教育評論』第27巻第1号、2013年。
- 11 『女子大学講義』は、月2回で2年間24冊をもって卒業することにし、第1期の講義科目は実践倫理、教育学、心理学、応用児童研究、家庭物理、生物学、生理学、衛生学、経済学、法制、応用社会学、文学研究、農芸、和歌作法、家事、料理、裁縫などがあつたように、かなり高度な内容であつた。
- 12 関本仁、前掲、148頁。
- 13 遠山佳治「近代日本における女子通信教育の一考察-大日本女学会の創立と『女学講義』刊行について-」日本風俗史学会中部支部編『民俗と風俗』第23巻、2012年。
- 14 遠山佳治「近代日本における女子通信初等・中等教育の推移と社会的役割-明治30～40年代における『女学講義』を中心に-」名古屋女子大学総合科学研究所『総合科学研究』第8号、2014年。
- 15 「女学講義録発行の趣旨」大日本淑女学会『女学講義録』1905年10月20日、頁数掲載なし（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- 16 『女学講義録』は、1905年から1907年まで合計8冊が発行されたことが確認されている。各冊の目次を見てみると、第1冊は修身講話、国語講義、女子作文法、第2冊は日本歴史講義、博物講義、理化学講義、第3冊は英語講義、算術講義、第4冊は画法講義、書法講義、割烹講義、第5冊は地理学講義、短歌作法、漢文講義、第6冊は家政学講義、文法、後第7冊は女流文学の沿革、婦人の衛生、日本小説の始め、家庭工芸叢話、第8冊は学者の妻、姫百合となっている（国立国会図書館デジタルコレクション）。
- 17 『家庭之友』雑誌自体の発行は1910年まで続けられていた。
- 18 「主婦の為に（家庭女学講義の発行）」『家庭之友』第3巻12号、1906年3月3日、362頁。
- 19 同上。
- 20 広告『東京朝日新聞』1906年3月28日、1頁。広告『読売新聞』1906年3月28日、4頁。なお、句読点は全て筆者がつけたものである。
- 21 「家庭女学講義（次の趣意書をお読み下さい）」『家庭之友』第4巻3号、1906年6月3日、頁数掲載なし。
- 22 広告『東京朝日新聞』1906年4月19日、1頁。広告『読売新聞』、1906年4月18日、4頁。
- 23 広告『東京朝日新聞』1906年6月2日、5頁。

-
- 24 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年3号、1906年6月30日、10頁。
- 25 「家庭女学講義（次の趣意書をお読み下さい）」前掲、頁数掲載なし。
- 26 同上。
- 27 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年8号、1906年12月10日、20頁。
- 28 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年9号、1907年3月10日、4頁。
- 29 「編輯の方針」『家庭女学講義』第1年1号、1906年4月30日、2-3頁。
- 30 「洋服取扱方の講習を開く」「編輯記事」『家庭女学講義』第1年5号、1906年9月10日、13頁。
- 31 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年6号、1906年10月10日、16頁。
- 32 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年7号、1906年11月10日、17頁。
- 33 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年8号、1906年12月10日、20頁。
- 34 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年12号、1907年7月10日、116頁。
- 35 「謹告（次号より『婦人之友』と改題するに就て）」『家庭女学講義』第2年3号4号、1907年12月、頁数記載なし。
- 36 広告『東京朝日新聞』1906年9月12日、5頁。広告『読売新聞』1906年9月12日、4頁。
- 37 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年4号、1906年7月30日、9頁。
- 38 『家庭之友』第5巻1号、1907年4月3日、29頁。
- 39 天使救世軍稿「各種講義録の反面」『学生タイムス』第2巻第3号、1907年2月15日、10頁。
- 40 天使救世軍投「中学講義録の無責任」『学生タイムス』第1巻第7号、1906年11月1日、9頁。
- 41 「読者消息」『家庭之友』第5巻5号、1907年8月3日、159頁。
- 42 同上。
- 43 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年4号、1906年7月30日、9頁。
- 44 同上。
- 45 「編輯記事」『家庭女学講義』第1年7号、1906年11月10日、17頁。
- 46 同上。
- 47 「謹告（次号より『婦人之友』と改題するに就て）」、前掲。